

アンリ・ベルクソン『時間観念の歴史:コレージュ・ド・フランス講義』

日本語版刊行記念 合評会

カント的立場からのコメント

北海道哲学会・北海道大学哲学会 合同研究会 2019年12月22日に使用したレジメに加筆（学会当日から理解が変化したため、内容は大幅に変わっている）

蔵田伸雄(北海道大学)

本講義では言わば「トリ」としてカントが登場する。本講義のメインキャラクターがプロティノスであり、「永遠の展開としての時間」といった時間観念に基づく壮大な時間観念の哲学史をカントで終えるという位置づけはやや無茶であるように思えなくもない。そもそも時間を直観の形式であるとして、意識との関連で、あるいは自由との関連で、時間を主観的に捉えるカントには「永遠の展開としての時間」という発想はない。「直観の形式としての時間」という時間理解、さらに「純粹悟性概念の演繹」におけるカントの統覚理解(統覚に[内的]時間は不可欠)などを考えると、本講義で扱われている(メインの)時間観念とカントの時間観念は異質なもののようにも思われる。カントにとって時間は世界の側ではなく、意識の側にあるからである。またカントにとって永遠-無時間的なものとは「論理」である。またカントの二世界論[叡知界と現象界]をプロティノス的な可知界と現実世界という図式と重ねられないことはないが、それも無茶である。

そもそもプロティノス(またはライブニッツ)との根本的な相違点として、カントには「世界靈魂」という発想がない。本書の最重要登場人物であるプロティノスと、「世界靈魂」という概念と関連づけてこの講義を終えるなら、本講義はカントではなく、シェリングかヘーゲルで終わっていてもよさそうなものである。本書を「世界靈魂」の哲学史とするならプロティノス→クザーヌス→ブルーノ→スピノザ→シェリングという順番になる方が適切であろう。

しかし、独特の時間哲学を構築するベルクソンが、プロティノスに由来する〈意識・時間・自由〉という三点セットを重視し、さらに「永遠と時間」という安易な対立に陥ることを避ける、本講義をカントの統覚で終わらせることにも十分な理由があるように思われる。また『試論』等のベルクソンの著作でのカント的な時間理解への関わり方(批判的展開)を考慮に入れるなら、本講義がカントで終わることにも必然性がある。本書で想定されているような「神」(さらにはプロティノス的な〈一者〉)の概念を切り詰めたところに結論として「意識の統一」を見ることで、〈世界靈魂としての神〉の物語の最終話に「意識の統一」という「神とは呼べないもの」が現れることで壮大な物語の幕が降りたのだと理解することもできるからである(だからこそ、意識から心理学へ、ということで次の講義は心理学について扱われることになる)。

本書ではライプニッツは「全体と結びつくモノイド」「予定調和」という点で、プロティノス的なイメージで描かれる。そしてライプニッツの試みと努力は、「プロティノスが与えた特別な形でのプラトン哲学への回帰」(p.323) であり、これをカントは受け継いでいる、とベルクソンは言う。だがカントはプロティノス的であるとは言えず、この講義は最後にカントについて論じることで、それまでの講義の内容をひっくり返すような結論になっているようにも思われる。ただここで着目すべきなのは、ベルクソンが「アイデアの哲学」と呼ぶものである。本書では「カントもまた、時間についての単純にして一なる、統合的な科学というものがあると考えていた」(p.323)とされる。「カントは、ライプニッツ同様、一なる科学を信じていたのです。普遍記号学の可能性を、とは言いません。より正確には、普遍数学、時間の統合的な一なる科学の可能性を信じていたのです。」(ibid.)ここでいう科学(science)とは日本語で言われるところの「科学」つまり自然科学ではなく、(カント的な・アприオリな原理の体系としての)形而上学のことであろう。「またライプニッツ同様、彼(蔵田注 カント)は、この科学を、プラトンの純然たるアイデアの哲学への回帰によって基礎づけようと考えたのです。」(ibid.)。そもそもカント哲学の枠組みがライプニッツ哲学、さらにはその影響下にあるヴォルフやバウムガルテンから得られたものなのだから、カントにライプニッツ的な枠組みが見られるのは当然である。だがカントがここで可能性を信じていたのは、普遍数学ではなく、「時間の統合的な一なる(科)学」つまり時間を基礎とした意識-統覚の形而上学である。ここでいう「アイデアの哲学」とは、「アприオリな原理の学」としてのカント的な意識の形而上学のことだと考えてよいであろう。

「さて、この解決策(デカルト的解決策)は、カントにしてみれば未だ過剰なものでした…。彼(カント)の考えでは、この科学を基礎づけるには、この科学の必要性そのものを公準として立てれば十分です。」(p.324)このような「(科)学の必要性」とは、カントにとっては意識を中心とした原理の体系としての形而上学の必要性のことだったと考えられる。ベルクソンは言う。「統合的な認識が存在すること、實在の全体についての一にして体系的な認識が存在することを措定すれば十分なのです」(ibid.)カントにとって「實在の全体についての一にして体系的な認識」とは、實在(カント的には現象)を可能にするものについての体系的な知識、つまり形而上学だということになる。「統合的科学与普遍的機械論を保証する神などまったく必要ありません。可知的なもの相互の予定調和さえも必要ありません。調和の要請、調和の必要性で十分なのです。カントが統覚の始原的・総合的統一と呼んだものがあれば足りるのです。」(ibid.) こうして本書の議論は、神は不要であり(必要なのはたかだか調和の要請であり)、統覚の統一があれば十分だという結論になる。これがベルクソンの結論であるとするなら、統覚の統一さえあればよく、「プロティノス的な世界靈魂もいらぬ」という結論になる。そしてここからベルクソンの意識の哲学が始まる、ということになるのだろうか。